東牖子

洋学文庫
文庫8
C 242
3

東牖子巻之三

帝國圖書館藏

昭和十年一月寄贈

如何の人乃性を実に潔白なる君子國なると清士の人性及
慶し兆沢記ものもら記いへど神明よ頻り祈りしも也く
見ること変わるもどるり醫薬方書の類をんるふ房術乃
玄薬をん病と紀者有てを治術を揚理論あり方
と者とも許多出せりそれ如の人らして何程妻妾の
美と富ん人も記愚頑なるもをしく病と求るこれ
者有ことを空ゞん奥せるんをけと俗用よいるゞわく
一條をん美事を計て知べし飲食男女の道人欲なとれ

○孔孟の道と学ぶ者ち聖人世堂の百分ごとも知て能
たまさら詩文乃手すさびひ博識強聞の才ふ有といへども
云乃一致の名ふ稀と和歌と学びて貫之躬恒の域ふ達く
書と学びて義之松雪の世界遠ひ全道の学ひ有と
うやうち身能技ふ通りてち浄瑠璃小ち之線のわひ
働ぐ師ふ勝者生ぐとしたる道のいやひひを以てちりそれとち
又七年十年寝食とも忘れて博古の功を積ぐれど師ふ
及とし能ひなしてうくおの業の中ふ出須能内ふ流乃を
洮潛ふ加ぐりて志とし師と求て学ぶべきとふくこまは
自己獨ふて容易くふ上達ひ出藍の徒ふなさぐや唯

いやひひ技術のくふやくふ達とうれど今流乃とる物ハ古の
洮潛ひふ道と美ふせひとの教今師道乃ひに上達とる物
ふ洮潛と通ぜと変戯の紙ふ行とるとが愚なる域とふや
ひ愚いうふひても解ぐ
○茶道と和ひて狸ぐと懶惰ふハ書色とひに今の洮
潛と狸く和せぐ志ひで小人の乃ふて道ふ志有ふん
人の避ぐ乃ちを
○戯画堂の法帖ふ唐人の書ひて筆書を出せり首とう
渋ひひや廣澤ふの模鸞百潭ふも渋く称ひふよ
千ぐ乃の友沼道比丘と高貴寺の慈ふ大和上の賞ふ

ある日寺へ行くも語る序に戯鴻堂の法帖の話を
出けるに唐人の書れ読ずして之を話せしに沼道師の申さ
るゝに戯鴻堂の唐人乃書ハ百法論の内れ話なきとて直り
読もせり流石の法師なりとも驚く是へ丸を道に逃し来
筆物を欲しと総りなどし廣澤子の英邁の才におぶかせ近
○芸妓の唱ふなる山姥といへる妖謡ありその節拍子を
法有く鞁の之地よ合り旋よ一曲乃関る迄拍子をとりて謡
山の謡よゝ謡ひ出んより間の手れ拍子も切迄も初中終連續
売く其地よ合れ紀州の人の節奏を嗟けしとぞ始之主鼓乃
之地さ之分損益の法よして其節そち前徳吉子泰川勝

よ教えひし雅楽なる原の拍子なるて九九の老湯の数を損益
あそのお湯の五七合く十二音となる是を又之合の一を減く
八ッあるを此八ッを十二言の内へ割込で打を雨滴拍子と云
之八ッの内れ一尺六の法数を省え寺之偶の間拍子を
大小鼓してれこれを本地として之唐尺と称て番匠の用る
法をも又武すの内へ八ッを割付しもこの損益の法よりいで
たりな年天王寺の伶倫園禄州ふるゝ人よ乱舞の法を
せしにこの損益の事よ及べ禄州不審せらる謡曲よも之
の損益の法有やしと問ふかたよりに地次第より一番の関
まで拍子を合せ見せしに禄州感心として雅楽の拍子

も是を出ぶとて立てり然らば妖婦の山姥を雅楽の律にも叶ふ程の拍子の揖益の澤を京師の儒生湖海氏の編集る謡曲正名図会に書わりこれは妄くあらざり滝曲の古原を正し大江益房の書なり歌集の物ふ祝ど

○京師へ出る若侍小朝と称とりとりたしくて仮情の丈恨とる太さくらべわくそれ浪の小朝なて朝の中て行程なり年始に用る射馬小朝を常の朝のよりり小朝なら侍る風味をみ州のものは大江相遠せり西塔にて京大坂小朝と称とる他ふ朝のよりて小朝ならばと若枝の人をいうて

○車の猫を七に極りたるものを西京は西法とる云て板の半に蒔絵せるを京にくらべ八に畫るるは西家に乳の附るねなるべし此不変のお湯七の数に法理を有なて洛人鬼やぶ集の名に七車と有り是を万年を車に七るは車をちらし車に七るは法つみくるくりのむらとなるとり号なるべし此七を数ふる涙例とる

○油蜆を方級の貝打に半能人のいるるなて統ども唯干く嘘ふものを制を云人文よるし金子て三度貝打となるとの多べば是を代年人を求むるふ多人なりしに和州郡山の梅海といる影工に尋しに梅海

いとふく先生なる蝌蚪をかりて行の貝行ハ鞘の様
よ破月行完ゆゑあてれとりとれを用ゆるとれ混せバ月
行のもしろうしからしと言へき制を道よより賢し丈
老圃よ問へとは宜しからず

○父祖の墓を等閑よし石塔の苔をも掃ざる人も
桃青が墓を忌日よ勤め割かたる斗の石碑を穢ひて建り
こ報恩の厚さハ行男の墓を損しおの生涯の大安する事跡の
師の命日ども定人も芭蕉塔よ厚く施へと臣着も下之
とし石碑よ冥とあせり然ども六十六部の回国者が供養
宝篋印塔の人エを費せしよ及ぶべからず

○字を用とるの具なり随分讀だし漢字ども用を知へ
箴し然書といへども人の難解なるの字よより漢が出
勢なり義之が花の字勾ひなく子昂が大の字小の用
とわさだ七才未満の小児の手し大の字も大の字るる爬
近も通用次第筆文よ恥ともなく定石漢して用を
あぶるハ恥辱あしと云だし花よのいるを揉どらば唇を動
せり人眼ありて書を見ざるらいらん

○衛京風艶杜撰の文字汗多あり連歌のものすれにて
新立家文字と云これを俗字と称へいいまもなお動よ
齋をしてなお古実さうしぞれハ都ちいやし今の書体るる門

世徳
盈品

千緑字書と見ざる左々紀年あをえて千緑字書八頃部
の頻函にて拔て和刻せり是を見るに日本紀の注家乃
こゝろ〻と板京物新左家こゝ云八清左ゝり代〻連歌の家迄住
せり故に元の元元と彩社家家迄〻孫を出すと今或師説と
なりぬ〻須賀斗月師も住せりとぞよりて今も拔のし史
藏の標れに彩左家師賀斗月師と来りり

○氏家を建るに大黒柱〻云物有元来出柱より棟梁を
定しるるまで大柱なりるべ〻古来名の正しれるに
今和州の工匠の中に大黒柱に次ものを小黒柱と云るハ一向
知に拔〻り

○返棚袋棚と云物今世八潜〻て氏間〻に没する家あり
元来返棚と月〻を客の家に没す〻物なり客有て正堂ハ
八来の〻れ客乃冠と上の棚に並鳥帽子の棚に並る〻
乃ハ没〻る〻物〻り袋棚〻云るに又恐れなるに上ふる
物をの〻る〻棚に金殿玉業の止んごとふる御殿に没る
をの〻〻で天に巻の清綱殿ごもを綿の叢に入る紙袋を
こふ紙袋と云れるべ〻それを天に御の〻れ御清兒頭に載て清兒あ
る〻没せ〻方に袋を清兒〻〻袋棚に入る〻〻ふる
板に冠烏帽子の棚より袋棚に上ふる〻〻
南殿の階上の棚に清兒二方出まんれを〻石ふ〻

らるゝ波佐見方ゟ[illegible]で板足利家系図御所を[illegible]
[illegible]より云氏堀ゟ遠棚袋棚を[illegible]の武家を送らるゝ
より紙を僧[illegible]て氏図を後るゝ[illegible]行ゟ袋棚へ書画の
軸物と白砂糖の相備[illegible]ゟ遠ゟ[illegible]ゟ[illegible]
[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
しゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
今ゟ氏図ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]

けしゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
武弥紀野袋棚の制有ゟ志弥家流ゟ[illegible]ゟ[illegible]
ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
内ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
多田南嶺ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
英雄人ゟ数くの流のゟ[illegible]ゟ[illegible]
しゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
遠棚ゟ血流ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
しゟ有ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]
○[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]

いへる洲人の獨今十百頼の中の白こ海内に汎満く賢愚
皆帰こうる者ふるる白こ然ども白者と称る人すれば家に
ちるん洲志人信濃の門人信安の米にて京醸ゞ丹ちる迄
人なり寶暦の初物故せ下ぬ米の者白れ白白さふる
白附の集に再出せしようり流布せり
○澤亭の輝をヲギヤレと称ぶこれ沖出者の洲洲せしこと
鄙しに酒蔵の称るり沖るに浪花甑屋所の色廓し妓帰に
六字分ゞ〳〵号る須城あり契價とん品名と立ること酒さ
畢劣尾繁ゞりこれに羽とてヲギヤレと古雅しして酒蔵
なり嘱ゆ大坂と商賈福湊し他に変せり

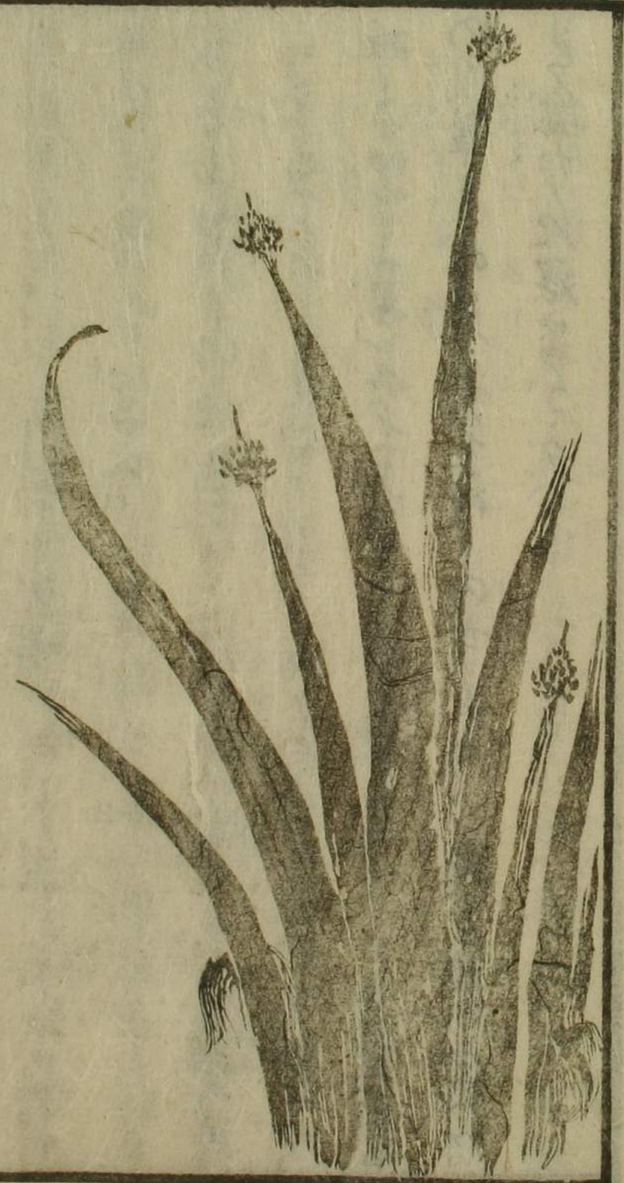
○を世ゆは菴洲〳〵こと〳〵洲人あり元と浪花の産ゞ〳〵
久〳〵東都有しが京に〳〵ふ〳〵に久ゞより長生庵
紀蔵と云洲人出来して大ゞ洲〳〵と紀渭わ〳〵こしゞ丈
に第して世ゆ洲洲〳〵と洲月出産ぜ〳〵の長生庵に返て
さしけるさこんこれのいかてあるゞ〳〵と名を変京師乃
年月を経ゞ〳〵紙園業水の迄に塾して一対を絶倒せし
世今新英邊の才有〳〵ゞ〳〵人と産洲せし世粗人の変洲る
変なりこ浪浪花に系く貴檀も無ゞ〳〵ゞの寿を極し
京坊の間小跋扈しさせる米るこ物と変秘洲ゞ〳〵称
こ後門弟こ出の秘して

梅花

いくるの白玉なさ高珍のうち手よりみて工風せしむ
十文の値これも秘せし世人こそ世にあはれも尚愛
菜中ちまは清行中五千が初めの詩ゆさ実に宝後秋
至帰といふ名洲人わりは産雑洲を点せしが洲号の博物る
よく吟味せしへ人を老人紙鳶の頃と祈願して清しが
物故せし後養子清しふ雅号を梅二本云白と名せしを
るを禅に彫付てりこれを見て初く清しが梅花の白解しう
禅さを問答せる西洲て作庭せ光の花て問しこれ
若曰有光のこぶしひらこのうぶぢひと初しし光

こ撤秘方体こるう紛しく又人情をうく高る男と七法秘示云
ううもこが欲ろ変ハうくのごくくと
一蕎麦二番信こ旅に芝居 又傾城 六欲七欲八九欲
るくくれの欲ろ延の的をこしてもが好こうろうこと人と異
物こせし横着者なり我内して点式こ骨漆の肉を見ひハ
出光わしこうや家の点式を紙南海の義刻ろうしが後
こ安こ高持ちくこう
○道祖の神号を清ちの神名なり風俗通こ黄帝のこ相
竜又ち黒祖こ称ちこ称こ幸を祭こて道路こ死後こ
ちちく行者八祖こ安りて祖を祈る是を祖道こ云(ちなり)

李興鼠画



しそを猿田彦命と幸の神とゝ侍るゝ故ゝ道祖の神
号を祀れるゆゑ〳〵

○ギボウシ〳〵ゝ綜の粉をこれ原来葱臺なり和名抄ふ
葱葱とトウキバシラ〳〵紀せり葱帽よりゝ〳〵半もすくなし
撥宝珠の撥の字ゝ面やゝ元来薄煙より五辛と禁給ふ
葱をまさるゆゑの〳〵板よりこれ和の古風よりゝ葱の用
らる〳〵半多〳〵先親王宣下の時糸肉のゝ葱の白根を喫
ゆゑ〳〵四方より長と成て糸肉〳〵ゝ人古実ゝ〳〵とで行葱屠
の風聞ゝ〳〵葱なて稀〳〵の古実ゝ〳〵撥宝珠の字ハ行
き腐かゝ宝字ゝ〳〵ゝ

ゝ州綱月ゝ李時珍の曰五辛菜ゝ之且立ゝ云ふ葱蒜
蓼蓾芥辛嫩〳〵菜と雑和〳〵てこれを啖ふ近新〳〵
茶とこれゝ云ふこれを刻辛盤〳〵ゝ〳〵なり和漢葱と
古例ゝ用ゝ半〳〵

○今世俗服ゝ用ゝる浅黄ゝ〳〵る色ハ浅青〳〵て黄色ゝ
らびこれも元ゝ浅葱なりゝ〳〵ゝ古来物と号ゝ〳〵ゝ皆
ゝ〳〵質実ゝ〳〵〳〵桃色ゝ〳〵〳〵〳〵号ゝ〳〵浅葱
りゝ〳〵萌葱の浅さゝ〳〵ゝ花色ゝ〳〵ゝ桃紅色
白の花の交ゝ〳〵是ゝ〳〵〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵
〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

縹文の袴ぜーと淡黄の帽子と花のびらしと云ふ縹色
おれどこれも縹の帽子袴ぜーなりべー又紫染の紫の緋を
奪ふと云ふ今の江戸紫の色とは大よ異ふ字書に紫い
わ絳緋と有るべい紅緋と紅とのゆに紫
と有又紅紫赤と字を列ねて書り紅と赤とのゆに紫
を挾て書り是をんん考るべいふーの色ふ今の絳紅の
いろれどーーこれどこて茅を奪ーと云ふ有なり紫染
のきふ病人の仁者ふ似ーるを増光り是を似て非るを者を
渭ーとでなんでいふ紫のいろれどーこれ物緋を奪だけんや是
よかどーどふ名ーと反せるとの淡黄花色ふどーとんん反べー

○紅とこれふひーと云ふ元呉の国より渡ーて藍の種ふ
や又いーーへと茅葉ふ縹を染る物の名とあいと称せーみや
いどーと呉より渡ーーー藍少くれのあいーも漢呉藍とも
云茅れり又縹色絹を染る藍仲を山藍ーと云ふよ山藍の
袖ーと云い濃縹いろなり又二藍ーーと云ふ呉藍ーと山藍とを
二度和ーて染ーー色ーて列ー位以下の小袴の色ーー桃花
葉茅葉ふ見ーーーりこれを黒紅と俗よいーーる黒紅の水引を
二藍の糸引といへるもこ藍ーーと云藍ーーをわせー物ふこ
○ふ茅方木あるーーいふる茅みふ緑呉なり是をもれて
天地の道の心ーーと推ーべーー天と文なり地を母ーー天地交

巻して万物育ん獨浜蔑せび獨湯立てび毛上に稚を
ふてくけさぐるハ母の巻なれどこ貧みれ下に苗を植てけぜざ
ること文の育おけまでこ今これを田圃に移を蒔ぜ生毋てる
地の乳ふしれて産れ出まべ土の中交黄ふるぐ山くよ貝刻兼
のるいろ黄なり漸けこと立ちさぐひ巻天の青色こ変て
北の黄色こと和して緑色こふるるりよれて緑交ないさ
る茶木の葉つ枝もるし　新くくの葉たのごく浜湯の乳
交よ変る在久しく色こ変ぐ又花こ実こ内ふう湯乳
ぐう蔑して浜乳こ立ぐ湯の編乳こ立て満盈る山く
久うしぐして枯枝落葉こ物理ふぐごう　嗚呼理ふこ悪

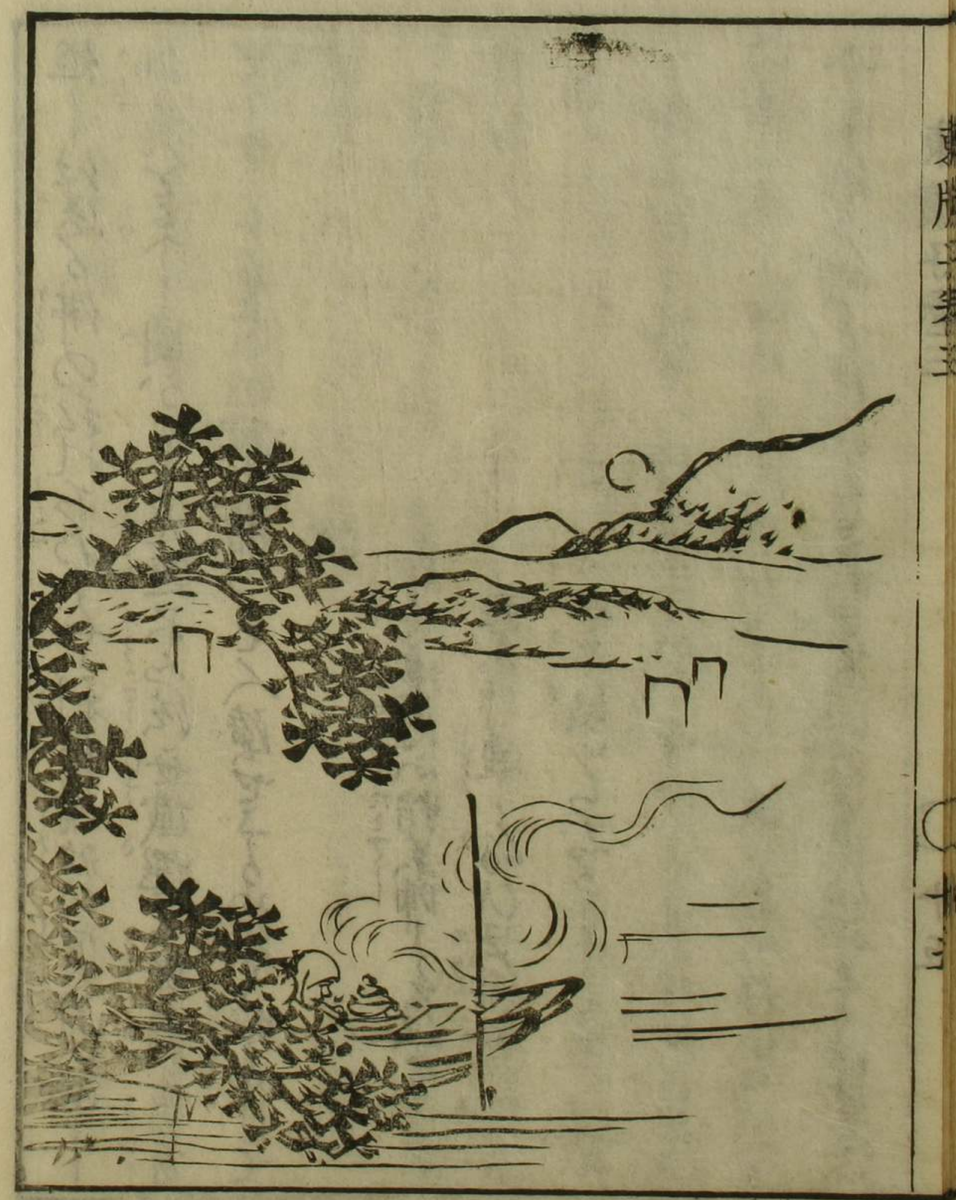
こ編ふて理こ窮るハ枝編ふて理ふハ二百又十餘日の廻
ふ枝まうしぐ今の古ふハ又年再閏して無用合くやる
枝ふるのかるべし
○天こた縊し地ハ右縊ん是天地の紀則ふて天こ日月
星辰東ふう西こ廻て北こふる技万態みる西ふう東衛沃
ハ新こ古ふこ辟ふう初て物こ渡し三後東ふう舶運
庭ふ乗りて往来こげく蒼太ふ完ふ今河ふ泥ふふる
金地の右縊こふ自然ふう天の樞ハ廻して北の樞ハ
ハ新ふるべし密邦ふう年毎ふ舶来して衆生の拱ふ
ふし豈考ふ国ふらんや

○世宗法とへる書の絹布厚薄の制天とん弐丈六尺
と定てり寛文五年の半なり尤当世の風よりは寛なりと
半たりしかるに弐丈六尺と定てしかるに元明
天宣和洪年中の定り七寸の制をこれを遵ってとぞ
必定此制を当今の人は服法とする貴賤他の所制より
少ぐ是を縮とせんやを匹の絹貴人の所を人の制より
を一匹を手書人を反完より庶民を着用を匹配匹まの
紀ゆ変り紀なりこと〳〵

○仏の方便の寓言は乃法華経の私なりこと〳〵
先地獄の図を見るに婆羅王の不直を法の所の手杖
但し仕送る僧の私れ有るや剃髪僧形の冥府に渡し
拘責を受し図ふし近遊不礼法無慙愧る斬罪案首
せいろくを有ふ地獄より僧のを人陸せざるいれも礼をして
獄ふかふしとあるべし

○洛陽永極寺東坊門寄福寺境内に蛸薬師と云仏有り東
坊門の西東なる所より坊門を蛸薬師通とよび又俗蛸の繪ら
を掛て病を祈て福を求しるふを験いちぢるしと云て湯ば
と称るに法寄福寺は浄土宗一ケの本寺ふして元は室町御所迄
の南より有しを後より今の処へ引きたり故より室町姉小路の北を
今寄福寺所と称し尤是利家の屋敷と此地迄ふ

蓼江邊



有し茶師吉澤茶師と云ものにて蛸茶師と呼ばれて愚俗
蛸の画馬を掛る事出来て足を浣濯し霊験のあるよしを
ことふれて同勢を通し給ひて寺僧を幸として枚岡御池
と號けるなれハ押小路南にて姉小路なり当店にひろしくは
姉小路の此池の側に針造醫居せり針屋新助家に姉小路の
針といへるもこれなり○後池の側の針造大津追分の針
大谷山の麓へ居を移して今御池の側に針造と號すも此
左之いふ長門守銑丹後縞明石縮のたぐひのごとし
○世俗貴賤の差別なく羽織と號する物を着く茶屋大
暦の頃より桜町帝永久の元亀の後公卿大夫窮なひて衣

服凋衰なる事に任せ足を勿論車馬を食不随ざる衣
冠束帯の法方も歩行し給へど晴の服に華美の常
らんしもというひかひ衣冠などの上へ明衣などの服をもよ
ほし歩行し給ふ是に道服しと云き法の書の比よりも折
てくさう給ふ故服折と稱し服は身に服る衣れ惣名く
呉服とくれてしとも倉の羽翼をとして割しみ身よ
被るの稱をて羽二重と云も御召縮の糸を以て恒の綾を
二つ合せ織しご縮とし云稱る服二重なるて献上ハ八丈
掛の名有がごとし　羽折羽織の諸説多けれど通用し
難し拝いよし〜を将衣素袍斗を以て奴袴とる々の類を

ちゃうしゃうしゃうの製なり 故に一向宗の和尚
肩衣ばかり着るし 袈裟は故実ばかりなり 浄土宗持流
号氏に服折に袴を着とるまでを初ひしゃ陣の時
服折をきるばかり袴なり 着とる程に変せう
とて一向門徒は 近年級下の雛みたいなる肩衣ばかりを
着せり 又陣服折とは 道服のごとしと云 是は
奥見の感を敵に知るまじきためなり
氏間小袖ばかり服折をきるなり
の袴ぜーとなり
○着の文に云板ばせー書あり 道明寺家 これが証拠
ぜ

巴左の費に方便に有 濡教の費とは無の費
深秘に有ことを述べるいうふことを費ふーして物を
拵に成るを無費なり 故に深秘ーとは成ばかり 此実
縁に初て見へ侍るとて灌頂深秘ーに有く密宗のもの
とも見る 然と悪仁と後の悪智なるべし
○和州郡山の茶毘所の地名をライショーとて郡城の東
半里許小宵是旧都の羅城の跡なりとやまわ東
辰の市で西東九條西九條ばかりと云村有 法間の清水も今
よりおもしろライショハ羅城の跡ーわ遠かうべーー今れ案
良と旧都の跡とのことを考て邦内検くーて考辰ひと

辰の市と云ふハ昔し辰の日毎に市を立し也　辰の市と云も和州の故死をいへり

うしろハ八省百官を並べし地なり此ハ伊勢物語なり乃
京ハ春日の里よなどゝ書きたれバ東ハ條わ白川ひんがしの
大宮なるものたぐひなるべし　東大寺西大寺の中を検闕しとを
もとドライショ邊朱雀通りもあるべし　故市井と云ハ昔ハ
和漢ともに市中村落家毎に井を設ず一てに一所に井を設
朝毎に同里の人井のかたへよりて水を汲びく人の聚る所なる
ほどに和左雑貨を持よりて交易を依て市井と云かんの蒹か
辰の市ハ毎の清水と縁ありし宜なるか
○いにしへ児童の手習ひする者ハ寺院へ行て学びし左
今童蒙の書家を寺と云寺屋と云南都ニてハアセチ

と云て寺とつ此アゼチハ菴室の称なりし之旧都ニて
寺のことを云ハ良福寺とさして云故ニ良福寺ニ対して
何宗の寺も何々の坊も菴室と称し左之頽没の称ニ
寺を宇治とのみもして称人ハ之井寺之足ハ殿山とぞ
云しを之井ちやを寺と称ともにし例ニ良福ハ寺と云
○唐の孟浩然が詩ニ春眠暁を覚えず處々啼鳥を聞く夜来風雨の聲
花落る事知多少と云を誦じて曰孟浩然首月なるべしと吹
嶺深ニ出せり東坡蘇東坡ニ登る酒の詩を云ふ詩話ニハ
失猫の詩と云なと同日の譚ニして清云の文人雅醜云とを
しかぬるの人あるもあし

○同七云古清代樂白頭翁詩云白中に流陽女史情新色しいろと小郎小町のかり面新のかりでなのたれうたしも命よりはうあるもしも絵もしの絵の代乃よをおもはるより自己の歌恩実に切なり文に射るり沙逸篇花長歌長しるへ同じく小町れかるよ花の色へうつろふりかりてしよ才学ふる森羅せしまふとよりもろ成程待るもうも切はて感慨深らしやうこれ劉廷芝の作ハいまゞ自分へ渡らで湖白氏文集渡もうとこれも実に白氏文集ふらゝ白氏長慶集の事なることや清女の枕草紙よ文集といえるも長慶集かりとゝ

文集ところ渡よ渡つとしとうや何ら意とあるも小町しこれとふ文の官ふしてよ上船たしゝ嘉寛ふる国秀ふり紙ふふ清樂ら盛唐のオよこれる精選の住作しゝ孫ふるこの寄ぶるら実よ歌紙かるふ今の侍人歴古歌人とれれ点だし

○同桃樽の歌伯の待ハ紀るよ月義馬帰京屋嘉実ふ省て合ふり夜ま尾ふ到客船しこ彦初ふの人ら一意よ解し蕉紀枕なもゝど大伴家持のそれ鶏のこゝ世るけしふ亜実の白を入れと夜て文よりしこ歌を疲ふう解とれゝだとれら七日八月氏の官月の為ふ氏ふり月歌馬の帰ふ人景月ふふ

これを育雪の霜のいまだ虚空よりくもりくもるこ
とを傷み過ぐるこゝろ情は一なり詩は元来しゐ深浪なく物
情を云ひ出せし物なるに言ふかぎれば詩作を専らの人の先
和歌を嗜古しく詩をまなびすべきたふ
詩をよろこぶ元来文邦の風雅を自然の人乃言ひ伝ふるは
たゞ人で物入歯の老人が時を味ひよろこぶ詩人の徳
ふ世ふぞ及ばらくこの一首も学びて方徳を詩人
なるは生まれど詩でなほ詩人を学び

東牖子卷三終